



柔道女子日本代表監督 増地 克之氏

困難を乗り越え
チーム一丸となつて
頂点を極めたい

柔道がオリンピックの正式競技種目として初めて採用されたのは、1964年東京大会からです。当時は男子のみで、階級も軽量級、中量級、重量級、無差別級の4階級しかありませんでした。日本人選手が全階級で金メダルを獲得ものと思われていました。しかし無差別級の決勝で、富士製鉄(現在の日本製鉄)所属の神永昭夫選手が、オランダのアントン・ヘーシンク選手に敗れる波乱がありました。ヘーシンク選手が勝ったことで、柔道の国際的普及が加速したとも言われています。回を重ねるごとに参加国数、出場選手数が共に増え、92年のバルセロナ大会からは女子も正式競技種目となりました。世界的な普及に伴い、外国人選手が力をつけ、今や日本人選手がメダルを獲得することも簡単ではなくなっています。

外国人選手はもともと筋力が強いうえにトレーニングを積んでいます。日本人選手が力で対抗しようとしても、なかなか難しい。だから、力というよりは技で勝負していくことになります。あとは我慢強さ、粘りを前面に出していくことが、勝つために必要となります。特に女子選手の多くは柔軟性があり、寝技を得意としています。その特長を活かし、私は代表監督として、投げの打ち合いで相手がつぶれたとき、しっかりとそつなく寝技に移行していくことで勝機を見いだす意識付けをしてきました。

勝負は一瞬で決まります。どう転ぶかわかりません。情報化社会ですから、すぐに研究され、同じ勝ち方をするのは難しい。今の自分の力に満足せず、常に進化して対応力を高めていくことが重要になります。試合中の状況判断と技の選択が、勝負を左右します。



畳が上がったら、選手は自分で試合をつくっていくしありません。そのため選手の主体性を引き出すことを心掛けてきました。選手から相談があれば、こうやったらどうだと助言します。こうせよと押し付けるのではなく、常にこちらから提案して選手に選ばせる。情報の提供に徹してきました。代表チームの監督やコーチとは、対戦相手を研究したうえで、選手に分析結果を伝え、どう試合を組み立てれば自分の強みを発揮できるかを判断するための情報提供が、メインの役割だからです。所属の監督やコーチともしっかりと情報を共有し、所属先でも実践してもらうことで、選手は地道に稽古を積んで準備してきました。

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大によって、2020年の東京大会は1年延期となりました。今は世界中の人々の命を守ることが最優先です。罹患された皆様と、感染拡大により生活に影響を受けているすべての皆様に、心よりお見舞い申し上げます。一人ひとりができる対策に努め、助け合うことで、この困難な状況を乗り越え、来年には世界中の人々が開催してよかったと思えるような東京大会になることを願っています。そして私たちはさらなる成長した姿を皆様にお見せできるよう、チーム一丸となって万全の準備をして臨み、頂点を極めたいと思っています。(談)

増地 克之(ますち・かつゆき)

1970年三重県生まれ。90年代の全日本選手権の常連として活躍。筑波大学大学院を修了すると新日鉄現在の日本製鉄に所属。無差別級のアジア王者に2度輝いた。現役引退後は桐蔭横浜大学や筑波大学で指導者を務め、全日本学生柔道優勝大会などでチームを優勝へと導いた。2016年から柔道女子日本代表監督。